

助詞・無助詞の意味と役割

4 B - 4

山田 剛一 中川 裕志

横浜国立大学 工学部

1 はじめに

話し言葉を扱おうという研究が増えている。話し言葉の特徴として挙げられる現象はいくつかあるが、その一つに、助詞の省略(脱落)と呼ばれているものがある。例えば、次の文では「私の発表」という名詞句の後ろに助詞が存在しない。

(1) 私の発表何番目でしたっけ?

特にかしこまった場面でなければ、話し言葉では、このような無助詞の名詞句が頻繁に現れる。既存の書き言葉の文法を持った解析システムでは無助詞を扱うことはできないので、何らかの助詞を補って、書き言葉での適格文にする必要がある。しかし、本当に助詞が省略されていて、それを補わなければならないのだろうか。

2 「無助詞 = 助詞省略」か?

(1)の文は、助詞はないが、不自然さは全くないし、人間が理解するのに苦労したりもしない。このことは、この文の意味を伝達するのに助詞が不要であったことを意味している。つまり、助詞は脱落したのではなく、使用されなかったのである。

このような場合、助詞の持つ格情報は、なぜ不要なのだろうか。文脈情報や常識が効いている場合もあるのだが、おおかたは、述語に関する語彙的な知識から、名詞句と述語の関係が判断できてしまうのである。例えば、名詞句の意味素性と、述語がとる意味役割の意味素性から、名詞句と意味役割との対応関係がユニークに定まることもある(細かな場合分けは[1]参照)。

一方、もちろん、助詞が必要な場合も多い。助詞が用いられる理由は大きく分けて二つあって、助詞がないと名詞句の意味役割が定まらない場合と、助詞固有の取り立て的な意味を表現したい場合に、助詞が必要となる。

3 無助詞の意味と主題性

(1)のような文を解析するとき、無理に助詞を挿入することは無駄だけでなく、文の意味を変えてしまう場合がある。つまり、助詞がないことにより、助詞があっては出せない意味を表現することがあるのである。そのような文を見ると、無助詞の名詞句が文頭近くにあって、主題性を帯びている場合が多い。無助詞が表現する主題性は純粋なので、その解釈に自由度が高いのである。

(2) 私脱いでもすごいです。

この例は某CMに出てきたものであるが、「私」について、「あなたは知らないだろうけど、実は脱いでもすごい」という意味あいが出ている。この文を「私が」や「私は」に変えてしまうと、「私」が取り立てられるため、「が」の総記や「は」の対比の意味の方が表に出てきてしまう。

4 助詞・無助詞の役割分担

いままで見てきたように、無助詞には無助詞の位置づけがあり、助詞を使用するのは役割に違いがある。一方、無助詞という選択肢のない書き言葉では、話し言葉では無助詞が担っている役割の大部分が、助詞や他の表現に割り振られていると考えられる。つまり、無助詞が許されているか否かで、助詞の持つ役割が違ってくるのである。

2節で触れたように、助詞の持つ格情報は不要なことが多い。話し言葉では無助詞が許されるので、「必要なことだけを伝える」というコミュニケーションの原則から、不要なら用いない方が自然である。もし、

Semantics of particle and no particle

Koichi Yamada and Hiroshi Nakagawa

Division of Electrical and Computer Engineering,

Faculty of Engineering, Yokohama National University

{aron,nakagawa}@naklab.dnj.ynu.ac.jp

取り立て的な用法がある助詞が、無助詞でも解釈可能な文において用いられているならば、それは取り立てである可能性が非常に高いといえる。

ここでは、複数の用法があるとされている助詞、格助詞の「が」と取り立て助詞の「は」について、無助詞との関係を考えてみる。

「が」

格助詞「が」の用法には、中立叙述と総記がある。単にガ格であるという中立叙述は無助詞でも表現できるため、話し言葉で用いられる格助詞「が」は、取り立て性のある総記の用法が多いと予想される。

「は」

取り立て助詞「は」には、提題と対比(対照)の用法がある。これは本来は厳密に分けられるものではないのだが、単なる主題性は無助詞で表現することができるため、話し言葉では、対比の意味で使用されることが多いと考えられる。

5 コーパスによる検証

前節の予想を検証するため、書き言葉と話し言葉のそれぞれのコーパスで、助詞の用法を分析した。無助詞が現れないものとして、日本経済新聞の記事本文(約1日分,1,567文)、無助詞が用いられるものとして、とあるサークルの飲み会での会話(書き起こし,およそ1,980文)を用いた。分析の対象は、格助詞「が」と取り立て助詞「は」(名詞句に接続している場合)である。

結果をそれぞれ表にして示すと以下のようになる。

	中立叙述	総記
自由会話	35%	55%
新聞記事	97%	3%

表 1: 格助詞「が」の用法

新聞記事では単にガ格を表すために使用される割合が圧倒的に高いが、自由会話では逆に、助詞固有である総記の意味を表現するために使用されることが多い。

	提題	対比	判断不能
自由会話	14%	62%	24%
新聞記事	55%	34%	1%

表 2: 取り立て助詞「は」の用法

話し言葉における「は」の用法の差は状況依存なため、コーパスからは判断できないものも多かった。それでも、話し言葉では対比を表現するために使用されるという傾向は見てとることができる。

6 おわりに

無助詞の意味と、助詞・無助詞の役割の違いについて検討を加えた。無助詞の有無が助詞の用法にまで影響を及ぼすことは、対象とする言語の性質にあわせた意味解析が必要であることを示しているといえる。

無助詞がどのような意味を表現するのか、またその条件は何なのか、包括的な議論が必要である。今後の課題としたい。

謝辞 本研究では「日本経済新聞 CD-ROM 版(94年版)」を使用した。研究目的での使用を許諾くださった日経総合販売(株)、その実現に努力された奈良先端科学技術大学院大学の松本裕治先生、および各種検索ツールを作成し公開してくださった方々に感謝いたします。

参考文献

- [1] 山田剛一, 中川裕志. 助詞・ゼロ助詞・無助詞. 電子情報通信学会技術研究報告 NLC95-63, 言語理解とコミュニケーション研究会, 電子情報通信学会, Dec 1995.
- [2] 丹羽哲也. 無助詞格の機能 — 主題と格と語順 —. 国語国文, Vol. 58, No. 10, pp. 38-57, 1989.
- [3] 丸山直子. 助詞の脱落現象. 月刊「言語」, Vol. 25, No. 1, pp. 74-80, Jan 1996.
- [4] 長谷川ユリ. 話しことばにおける「無助詞」の機能. 日本語教育, 80号, pp. 158-168, July 1993.
- [5] 田窪行則. 名詞句のモダリティ. 仁田義雄, 益岡隆志(編), 日本語のモダリティ, pp. 211-233. くろしお出版, Aug 1989.